

# イギリス「道徳劇」とD.ヒュームの「共感」概念を手がかりとした 道徳教育の手法の研究

松永 幸子\*

## A study on Moral Education based on the “Moral Play” and Moral Philosophy in England

Sachiko MATSUNAGA \*

### 【要旨】

本稿では、特徴的な道徳教育を行っているイギリスの教育方法を中心に、その歴史的技法と理論も含めて検討した。現在、イギリスで実施されているものに演劇的手法があるが、中世で行われていた道徳劇に遡り、演劇的手法の方法と効果の抽出を試みた。中世の道徳劇では、人物ではなく、善悪に判別された感情、行動そのものが擬人化され演じられている。更にイギリスの著名な哲学者であるヒュームは、道徳感とは、理性ではなくすべて「感じ」から生じており、共感が道徳において最も重要な概念であるとしており、ただ、共感是非常に変動しやすいものなので、共感の変動に応じて、道徳感情は変動するものであると主張していた。ヒュームにあっては、共感が人間本性において極めて強力な原理であり、共感が道徳的区別の主要な源泉なのである。これらイギリス中世の道徳劇、ヒュームの思想から、現代の道徳授業における教育方法に新たな示唆が得られた。

キーワード：イギリス、道徳教育、演劇的手法、D.ヒューム、共感

### はじめに

我が国において、道徳が特別の教科となって数年が経過した現在、学校現場では、教師たちによる授業方法の模索や試みが継続されている<sup>1</sup>。教材については、読み物のほか、コールバーグの道徳性の発達理論で有名なハインツのジレンマやハーバード白熱教室でマイケル・サンデル教授により扱われたようなモラル・ディレンマを子ども用にアレンジした教材も販売されている。

しかし、実際に教科書を中心に教えること以外では、授業にどのような工夫を加えれば良いのか、また、教師の関わり方について、検討課題が多く残っ

ているといえる。

そこで本稿では、他国の道徳教育、とりわけ特徴的な道徳教育を行っているイギリスの教育方法を中心に取り上げ、その歴史的技法と理論も含め、詳らかにしていきたい。

### 1. イギリスでの道徳教育の実際

イギリスの道徳授業では現在、特徴的な工夫として、演劇的手法が使用されていることが挙げられる<sup>2</sup>。演劇的手法については、道徳以外でも多くの科目に取り入れられており、子ども自身の体験や創造の過程が重視される活動であるとされる<sup>3</sup>。

\* まつなが さちこ 相模女子大学学芸学部英語文化コミュニケーション学科

代表的な演劇的手法には、次のようなものがある。役割演技（Role-play）、質問コーナー（Hot-Seating）のほか、静止画（Freeze-Frame）、専門家のマント（Mantle of the Expert）、教師も演技者となる（Teacher-in-Role）、思考の軌跡（Thought-Tracking）など、100種類を超える演劇的手法がある<sup>4</sup>。これらの演劇的手法を取り入れた教育活動が「ドラマ教育」であり、広瀬綾子はドラマ教育を「演劇的手法による道徳性の育成は、イギリスにおけるドラマ教育のなかでその真価を発揮する」と位置付けている<sup>5</sup>。ドラマは、観客を必要とせず、子どもたちの創作過程などについて評価がされる。たとえば10代の自殺についての事例を、本人や周囲、家族等の役割で演じていく。教師もそこに参加する<sup>6</sup>。

日本においても、文科省により、道徳授業の中でロールプレイが推奨されている。しかし通常、それらは授業の一部分であり、役割演技のみに留まっている、また、日本では、一般的には、教師の指示により児童生徒が役割演技を行う形になっている。

イギリスのドラマ教育では、事例に基づいて、子どもたちが自ら演技を考へること、創作することで、登場人物への感情移入や、状況の把握が深められることが考えられる。また、教師も参加することで、児童生徒も恥ずかしがらずに行えるのではないだろうか。

## 2. 中世イギリスの「道徳劇」

前節でイギリスの道徳教育で演劇的手法が用いられることについて取り上げた。ここでは、そのルーツを探ってみよう。イギリスでは、16世紀から道徳劇というものが存在していた。道徳を劇で行うという手法は、歴史的にあった道徳劇の流れの中で生まれてきたのではないだろうか。本節では、当時の道徳劇がどのようなものだったのかを概観し、現代の演劇的手法との相違を抉り出したい。

英語の道徳劇は、14世紀半ばごろから具体例がみられたという。道徳劇にあたる英語は、moral, moral play, morality, morality play moral interlude などがある<sup>7</sup>。

著者は不明であるが、劇中の濃厚なローマカトリックの説教的要素や道徳倫理とわかりやすい擬人法から、学識ある聖職者や大学関係者と目されている<sup>8</sup>。今回取り上げるものは宗教改革以前に創作された作品で、これら道徳劇のテーマは、4つである。1つは人間の霊魂をめぐる善悪の争奪戦、2つ目は

死の召喚、3つ目は霊魂と肉体の論争、4つ目は天国会議となっており、これは中世の寓意文学の4つのテーマを受け継いだと考えられている<sup>9</sup>。

まず、15世紀から16世紀に創作されたとみなされている代表的な作品の中から、いくつかの道徳劇の登場人物を取り上げていく。

- ・『堅忍の城』（完全に近い形で残るものとしては最古の道徳劇と目されている<sup>10</sup>）旗手2人、現世、貪欲、ペリアル、高慢、嫉妬、怒り、肉体、貪食、怠惰、邪淫、人間、善天使、悪天使、快樂、愚行、陰口、告白、悔悛、愛徳、節制、貞潔、勤勉、寛大、謙遜、忍耐、死、召使い、霊魂、慈悲、真理、正義、平和、父
- ・『人間』慈悲、災厄、流行、当世、ろくでなし、人間、ティティビルス
- ・『現世と幼児』現世、幼児、良心、愚行、堅忍
- ・『青年』愛徳、青年、放蕩、高慢、邪淫、謙遜
- ・『喋り屋ヒック』憐憫、観想、堅忍、自由意志、想像、喋り屋ヒック
- ・『万人』使者、神、死、万人、友情、親類、従兄弟、財産、善行、知識、告白、美、力、分別、五感、天使、神学博士<sup>11</sup>

以上のように、1つの劇に多くの人物（存在）が登場する。『硬忍の城』から劇の一部を抜粋する。

人間：貪欲、私はどこへ行くとよいのだろう。

どの道を行くとよいと思うかね。私をどこへやりたいのか。髪は白くなり、年を取り……（中略）

貪欲：（中略）おまえの年になったらたんまりと財産を持つことが、ますます必要になる。マルク、ポンド、召使い、家屋敷、城、砦を持つのだ。だから、わしの勧めるようにしな、貪欲と組むんだよ。来いよ、そうすれば、おまえの願いをわしが代わりに申し出てやる。きっと少なからざるお給金を立派な現世がお与えくださる。 （中略）

節制：貪欲に走る所業に及ぶとは、何と愚か者だと皆さん一人一人がお分かりです。現世の幸せは三本足の腰掛みたいなもの、一番必要な時に役に立たないのです<sup>12</sup>。

次に『人間』からも一部抜粋する。

（中略）

慈悲：こんなくだらぬことを言って、おまえたち後悔するぞ。

流行：3人ともずらかることに異存はねえ。神父さんは俺たちの口上手にうんざりしてござる。だから、これ以上ぐずぐずしているつもりはねえ。

あんたなんか、神と聖母マリアによって悪魔修道会へ入れてもらうといいんだ。

当世：風が吹こうと、雨が降ろうと、俺は二度と戻らんが、てめえなんか、悪魔に目玉二つともくり抜かれろってんだ。野郎ども、さっさと行こうぜ。

ろくでなし：行こう、悪魔の道にかけて。こっちが扉、こっちが出口。あばよ、ジェフリーどん、お寝んねしな<sup>13</sup>。

以上、取り上げたように、中世の道徳劇では、「貪欲」や「怠惰」といういわゆる「悪」と、それに対して、「慈悲」「知識」等の「善」が位置づけられている。これが善悪の争奪戦ということであるが、このように人間の行為や考えを既に善悪に明確に分け、擬人化して登場させているところに、現代の道徳教育の演技手法との違いがある。

### 3. イギリスにおける道徳哲学—D. ヒュームを中心に

前節では、主に15、16イギリスにおける道徳劇を取り上げた。その後、宗教改革を経て17・18世紀イギリスで、生命やモラルをめぐる論争が盛んであったことが明らかにされている<sup>14</sup>。そこでは、数千の膨大な作品を執筆した著名な文学者ジョン・ダン、哲学者デビッド・ヒュームや牧師、医学者らによる道徳（モラル）論が生命や自己とのかかわりで展開されていた。イギリスにおける道徳の思想について、ここではその中から、『人性論』において、体系的な道徳論を著したヒュームの道徳論を中心に取り上げていく。

ヒュームによれば、哲学は理論的なものと実践的なものとに分けられ、道徳は実践的なものに入る。そのため、道徳は行為や情緒に影響を及ぼすものであり、それゆえ道徳は理性に由来しえない。理性は単独ではそのような影響を何も持ちえない。理性の働きとは、真理や虚偽を発見することであり、真理や虚偽とは、諸観念の、実際の諸関係に関する一致・不一致、もしくは実際の存在、事実に関する一致、不一致のいずれかに対して言われることであり、われわれの情念、意志のはたらき、行為には、そのような一致、不一致のいかなるものも認められない、としている<sup>15</sup>。「理性は情念の奴隷である」とするヒュームは、道徳的区別は「道徳感 (moral sense)」から派生し、一般的に道徳とよんでいるものは、「感じ (feel)」によって判断されるという<sup>16</sup>。

ヒュームは、「道徳的な善悪が、理性によって区

別されるのではなく、われわれの感情によって区別されるのは確かなことである。」と明言している<sup>17</sup>。そのヒュームが道徳において最もこだわっているのが、「共感 (sympathy)」である。

共感とは、人間本性に備わる非常に強力な原理であり、それはわれわれの美に対する感性に大きな影響力を持ち、そしてそれは、人為的徳すべてにおいて道徳感情を生み出すものである<sup>18</sup>。

ヒュームにとって、道徳感とは、理性ではなくすべて「感じ」から派生し、判断がなされている。ただ、共感是非常に変化 (very variable) しやすいものであるため、共感の変動に応じて、道徳感情は変動すべてに余地を認めなければならない。と指摘している。ヒュームは、見知らぬ人より知人に、外国人より同国の人に共感するというふうに共感が変化する例を挙げている<sup>19</sup>。

この共感の変化は、コールバーグのハインツのジレンマやトロッコ問題に通じると考えられる。コールバーグの「ハインツが妻が特殊ながんにかかっており、製薬費の2倍の高額で売られている新薬を手に入れるために、薬屋から盗むべきかどうか<sup>20</sup>」という問いについて、問われた人は、まず、自分がハインツだったら、と仮定する。そして次に妻の苦しみを考え、ここに妻に対する共感が生まれる。しかし、盗むという行為により、司法により裁かれることや薬剤師の損失を考える。この思考の段階は、近い者から遠い者へと移動し、共感も移動すると考えられる。一方、有名なトロッコの問題がある。「トロッコのブレーキがきかなくなり、道が二手に分かれている。一方には線路上に3人が、もう一方には1人が立っているとき、どちらに進みますか？」と問われる問題である。通常、被害が最小限の1人の方に進むと考えるが、もしその1人が自分の親や配偶者、友人で、3人の方は知らない他人だったらどうするか。というと心の変化が起き、葛藤が生じる。では、他人なら3人を犠牲にしても良いのかという良心の問題がある。

これらのジレンマは、ヒュームがいう「共感の変化」につながるものがあるだろう。最初は、3人を犠牲にすることで、その数や、その背景にある家族の悲しみに共感する。しかしながら、それが他人であり、もう一方の線路上にいる1人が親であったり、配偶者であったり、友人知人であったりする場合には、そこへの強い共感が生じる。このようにヒュームによる共感の変化は、日常的に我々に起こり、大

小様々なジレンマをもたらしている。

「正義 (justice)」についてヒュームは、人類の善の目的のために人為的に発明されたものであり、ほかに忠誠、諸国間の法律、謙虚さ、礼儀作法に関しても同様であり、これらはすべて、社会の利益のために人間が考案したものに過ぎない、と主張している。社会の善は、われわれ自身や友人の利益が関わっていない場合、共感によってのみわれわれの喜びとなる。このようなことから、人為的徳すべてに対してわれわれが払う尊重の源泉は共感であると述べている<sup>21</sup>。そして人間本性に非常に顕著にあらわれる2つの原理が、この「共感」と「比較 (comparison)」としている。われわれの判断が、対象と比較される対象とのつりあいにおいて、変動するということがあり、その(比較の)情念の働き方は、共感とはまったく反対であるとする。共感の原理と比較の原理とは、そのはたらき方が反対であると繰り返している<sup>22</sup>。

いずれにせよ、ヒュームにあつては、共感が人間本性において極めて強力な原理であり、「共感の持つ力は、他のいかなる原理とも協働せずに、単独ではたらく場合でさえ、是認のもっとも強力な感情をわれわれに与えるほど十分なものであり」共感が道徳的区別の主要な源泉だということに、疑いの余地はないと主張する。たとえば、公共的な善は、共感によってわれわれがそれに関心を寄せる場合をのぞけば、われわれには無関係なものであり、どうでもよいものであり、他のすべての徳に関しても同じようなことが推定される。見知らぬ人の幸福が、その人とは無関係なわれわれに影響を及ぼすようになるのは共感のはたらき以外にはない。それゆえ、その原理こそが、是認の感情の原因になるのであり、この感情は社会によって有用であるか、その本人にとって有用であるような徳を眺めるたびに生じるものである。これらのことが、道徳のもっとも重要な部分を形成しているとしている<sup>23</sup>。

前節で取り上げた道徳劇には「共感」が描かれておらず、そのような登場人物は見当たらないが、ヒュームは道徳において、共感が最も作用しており、その共感の育成こそが道徳教育につながることを示唆している。

## 考察 道徳教育における演劇手法の効果と課題

### 1) 演劇的手法の効果

前章までに取り上げたイギリスの演劇的手法、道

徳劇、ヒュームの思想から、道徳教育における教育方法としていくつかの示唆を得ることが出来る。

現代の道徳の演劇的手法の源流とみられる中世の道徳劇では、「慈悲」や「怠惰」、「愛徳」といった感情や行動そのものが登場人物としてあげられており、善悪が明確で、その役割は固定されている。また、ヒュームが道徳の中心であると主張する「共感」はそこには登場していない。共感概念の歴史については、別稿に譲ることとするが、ヒュームは、この「共感」は変化しやすいものだと主張していた。

現代の道徳教育の演劇的手法には、これらの演劇や哲学を組み入れると仮定すれば、次のような方法が可能となるだろう。感情や行動について役割分担する。しかしそれは固定しない。固定すれば、善と悪とを決めつけて教え込むことになる。最初の感情や行動があり、そこに交流、コミュニケーションや共感が入ることで感情も行動も変わる。これがヒュームのいう共感の変化だ。そのため、その都度、児童生徒の役割も変化する。たとえば、「無関心」の役割の子どもが、「コミュニケーション」役とかかわることで「共感」が生まれ、「関心」を持つ役割に変わる。あるいは「優しさ」役に変わるなどである。役を固定しないことは、人の心の変化をあらわしている。このような方法は、児童生徒に、人の感情や態度が、他者との関わりにおいて変化しうるのだということを示すことが出来る。人間や「常識」、環境や社会によって変わりうるのだということも出来るだろう。それは多様性への理解にも通じるのではないだろうか。演劇的手法やロールプレイは、児童生徒がその役を演じることで、登場人物の行動やそれに伴う心情をより深く理解することが出来ると考えられる。また、他の児童生徒は、他人ではなく自分のクラスメートや教師など身近な人が役割を演じることで、より、その教材・ストーリーに興味を持てる。実際にこの手法は道徳に限らず、他の教科でも応用できる。

実際、教育実習生が小学校でおこなった理科の授業でロールプレイを取り入れた場合に、児童の集中力が増し、児童の意見交換が活発になった例もある<sup>24</sup>。また、イギリスの演劇手法のように、児童生徒だけでなく教師も参加することで、子どもたちがより臨場感や安心感を得られると考えられる。イギリスのように、演劇全体を子どもたち自身が考えることで、より話の内容を理解し、登場人物の心情を想像し、共感できるのではないかと考えられる。

## 2) 演劇的手法の課題

演劇的手法には上記のような効果が期待できる一方で、ロールプレイも含め、演劇手法が非常に慎重に用いられなければならない問題もある。いじめや自殺などの事例を扱う場合である。

広瀬は、イギリスの演劇的手法において、「いじめ」のようなテーマを扱う場合には、教師が役になって状況に介入することで、子どもたちを守ることができるとしている<sup>25</sup>。しかしながら、たとえ教師が参加したとしても、その参加の仕方によっては、いじめられる役を更に傷つけることもある。

たとえば、渡辺雅之は、自身の中学教師の経験の中で、いじめが起きたため、「いじめを体験するロールプレイ」を行った例を紹介している<sup>26</sup>。渡辺は当時担任していたクラスで、いじめのロールプレイを実践したときの生徒の反応や効果について述べている。役割は、「いじめの子」「いじめられる子」「回りではやし立てる子」に分けた。いじめられ役の筆箱やノートを投げたり悪口を言ったりして演技が開始された。いじめられ役の生徒は、最初は面白がっていたが、1分後には本気で嫌がり始めたため演技を中止させた。渡辺は、いじめられる役には、当時クラスで一番威張っている生徒をあてている。それにもかかわらず、いじめられ役のその生徒は、「最初はどうせ演技だからっておもしろがっていたけど、たった数分だけこんなのが続いたら、死んじゃうかも」と話し、いじめる役も、最初は面白がっていたけど、相手が真剣になってきたので、段々やりづらくなってきたと話している<sup>27</sup>。

ここでは、いじめの演技により、当事者の気持ち理解しやすいという一定の効果はみられるものの、いじめられる役割について、クラス一の強者をあてても深く傷ついた様子がみられる。これは教師と生徒の強い信頼関係があったからこそ出来ることであり、特にいじめの演技については、相当に慎重な配慮が求められるといえる。また、教師がいじめに加担していた例もあり、教師も演技を行う場合、時間的余裕がなく、いじめ問題の当事者に深くかわる余裕のない教師の役割をどのように演じるのか。また、それによって、いじめられ役や周囲に与える心理的影響も十分に考慮しながら行われなければならないだろう。

## 3) カナダの道徳教育・シティズンシップ教育

最後に、共感教育を実践しているカナダにおける

道徳教育や人格教育に触れておきたい。

カナダでは、たとえば幼稚園から中学生までに乳児の育成に携わらせることで共感力を育てるという取り組みがある。乳幼児を持つ地域の住民に協力してもらい、小学校で育児を手助けする試みである。一定期間、乳児の育成に携わることで、児童たちは、育児の難しさや乳児の成長への喜びを通して共感力を養うという<sup>28</sup>。カナダでは、連邦政府に教育省はなく、国として教育方針が統一されているわけではない。教育の権限は各州にある<sup>29</sup>。そのため、このような教育は、必ずしも道徳教育の中で行われているわけではない。カナダでは、道徳教育を義務化しているのは、全10州のうち3州に過ぎない。選択制が2州、残り5州は道徳教育の実施規定を有していない。道徳教育を義務化している州の1つがオンタリオ州である。オンタリオ州では、道徳教育として人格教育に取り組んでいる。背景にいじめなどの問題があり、ヨーク地域学区教育委員会で2000年に人格教育の導入決定、2002年から優先事項として実施することが決定された。内容は、尊重、責任、正直、共感、公平、自発性、がまん強さ、有機、誠実、楽観主義という10の価値を直接教えるという方法である<sup>30</sup>。同州では、教育課題の4つが、学力向上、多様性の尊重、市民性の発達、保護者とコミュニティとの連携であり、その中心に人格教育が位置付けられている<sup>31</sup>。しかし道徳は教科や科目に位置付けられていないため、試験などの実施や評価は行っていない<sup>32</sup>。

また、他の州では、多様性の教育やシティズンシップ教育が実施されている。たとえばアルバータ州では、シティズンシップ教育として、社会科のカリキュラムで、「深い多様性の尊重」と「多様性の調整」をとおした「社会的結束」についての教育が行われている。単に多様性を尊重するだけでなく、深く理解し、共生する（共に生きる）という目標と協働の思想がその根底にある<sup>33</sup>。

2015年に導入された4学期制の教員養成プログラム（The Enhanced Teacher Education Program：ETEプログラム）では、「構成と多様性（equity and diversity）を大学の教員養成カリキュラム上で扱うことが義務化されたために、大学が必修科目において多様性についての学修が普及しつつある<sup>34</sup>。

これらに加え、ブリティッシュ・コロンビア州では、国ではなく地域や家庭の食文化に注目させ、食の授業を通じて、多文化な背景を持つ生徒や多文化

共生について考えさせたり、他国との食文化の違いに気づかせる授業を行っている<sup>35</sup>。紙幅の都合上、カナダのこれらの教育については、別稿を起さねばならないが、このようなカナダ各州の多岐にわたるグローバル・シティズンシップの教育は、広く人格教育に貢献するものであり、今後のわが国の道徳教育に示唆を与えるものである。既述のイギリスの演劇手法のさらなる検討とともに、カナダ各州のシティズンシップの教育について詳細に探究することを今後の課題としたい。

## 註

- 1 たとえば文部科学省「道徳教育アーカイブ」の教師による実践事例等では、板書やICTの使用等、教師による様々な工夫が行われている。
- 2 広瀬綾子「道徳性の育成における演劇的手法の導入：イギリスにおける「ドラマ教育」を手がかりに『新見効率大学紀要』第41巻，2020年
- 3 広瀬，同上，56頁
- 4 広瀬，同上，55-56頁
- 5 広瀬，同上，57頁
- 6 広瀬，同上，57-59頁
- 7 鳥居忠信，山田耕士，磯野守彦「初期道徳劇の世界」『イギリス道徳劇集』（鳥居忠信，山田耕士，磯野守彦訳）リーベル出版，1991年，8-9頁
- 8 同上，14-15頁
- 9 同上，20頁
- 10 同上，34頁
- 11 同上，40，281，355，425，480，548頁
- 12 同上，188頁
- 13 同上，290-291頁
- 14 松永幸子『近世イギリスの自殺論争：自己・生命・モラルをめぐるディスコースと人道協会』知泉書館，2012年
- 15 D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, Oxford University Press, 2000 (1740), pp. 7-13/ヒューム『道徳について』（神野慧一郎，林誓雄訳）京都大学出版会，2019年
- 16 松永，前掲書，46-47頁
- 17 Hume, *op.cit.*, p. 376
- 18 *Ibid.*, p. 369
- 19 *Ibid.*, pp. 371-372
- 20 L. コールバーグ『道徳性の発達と道徳教育：コールバーグ理論の展開と実践』（岩佐信道訳）麗澤大学出版会，1987年，181-185頁

- 21 Hume, *op.cit.*, p. 369.
- 22 *Ibid.*, pp. 376-379
- 23 *Ibid.*, 393-394
- 24 川口市立神根東小学校での教育実習時の研究授業（実習生，埼玉学園大学，山田幸輝，2013年）
- 25 広瀬，前掲書，56頁
- 26 渡辺雅之『いじめ・レイズムを乗り越える「道徳」教育』高文研，2014年，137-138頁
- 27 渡辺，同上
- 28 永田洋子，櫃田紋子，福川須美，伊志嶺美津子，田島昌子（2001）「他者への共感を育てる教育プログラム—カナダの『共感教育』の実践とその有効性—幼児期から始める親になるための準備教育—」明治安田こころの健康財団『研究助成論文集』（37）
- 29 溝上智恵子『カナダの道徳教育：オンタリオ州の人格教育』『人間と教育』（116），2022年，102頁
- 30 溝上，同上，104-105
- 31 溝上智恵子，「カナダの道徳教育政策」『カナダ教育研究』（15），2017年，25頁
- 32 溝上，同上，26-27
- 33 坪田益美「社会的結束」に取り組むカナダ・アルバータ州の社会科カリキュラムの構造」『社会科研究』第77号，2012年，14-15
- 34 児玉奈々「オンタリオ州の大学の教員養成プログラムにおける多様性：カリキュラム設計の考察」『カナダ教育研究』カナダ教育研究会，2020年，50-52頁
- 35 上野顕子，星野洋美，伊藤葉子「カナダの家庭科における多文化共生教育の実践：中等教育学校教員のインタビューから」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』（59）104，2016年，1-2頁。

## 引用文献

- D. Hume., *A Treatise of Human Nature*, Oxford University, Press, 2000 (1740) / ヒューム『道徳について』（神野慧一郎，林誓雄訳）京都大学学術出版会，2019年
- 作者不詳『イギリス道徳劇集』（鳥居忠信，山田耕士，磯野守彦訳）リーベル出版，1991年
- L. コールバーグ『道徳性の発達と道徳教育：コールバーグ理論の展開と実践』（岩佐信道訳）麗澤大学出版会，1987年
- 広瀬綾子「道徳性の育成における演劇的手法の導入：

- イギリスにおける「ドラマ教育」を手がかりに『新見効率大学紀要』第41巻, 2020年
- 松永幸子『近世イギリスの自殺論争：自己・生命・モラルをめぐるディスコースと人道協会』知泉書館, 2012年
- 永田洋子, 櫃田紋子, 福川須美, 伊志嶺美津子, 田島昌子 (2001) 「他者への共感を育てる教育プログラム—カナダの『共感教育』の実践とその有効性—幼児期から始める親になるための準備教育—」 明治安田こころの健康財団『研究助成論文集』(37)
- 渡辺雅之『いじめ・レイシズムを乗り越える「道徳」教育』高文研, 2014年
- 溝上智恵子『カナダの道徳教育：オンタリオ州の人格教育』『人間と教育』(116), 2022年
- 溝上智恵子「カナダの道徳教育政策」『カナダ教育研究』(15), 2017年
- 坪田益美「社会的結束」に取り組むカナダ・アルバータ州の社会科カリキュラムの構造』『社会科研究』第77号, 2012年
- 上野顕子, 星野洋美, 伊藤葉子「カナダの家庭科における多文化共生教育の実践：中等教育学校教員のインタビューから」『日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集』(59)104, 2016年
- 永田洋子, 櫃田紋子, 福川須美, 伊志嶺美津子, 田島昌子「他者への共感を育てる教育プログラム—カナダの『共感教育』の実践とその有効性—幼児期から始める親になるための準備教育—」 明治安田こころの健康財団『研究助成論文集』(37), 2001年
- 文部科学省「道徳教育アーカイブ」 [doutoku.mext.go.jp](http://doutoku.mext.go.jp)  
(最終アクセス日：2024年1月9日)

